啄木・中也・道造 詞華集

夢（ゆめ）

美しい日本の詩歌⑩

啄木・中也・道造 詞華集

夢（ゆめ）

美しい日本の詩歌⑩

岩崎書店

画　　家　・的場遊子（まとば　ゆうこ）
友禅染、型染、草木染、絞り染などの絹の染色をへて、現在は屏風絵を手がける。毎年、軽井沢にて屏風展を開催している。東京都杉並区在住。

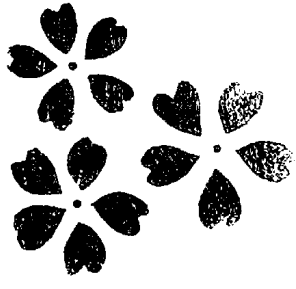
編　　集　・北川幸比古（きたがわさちひこ）1930年東京都新宿区生まれ。
早稲田大学一文国文科卒。童話『むずかしい本』（第1回新美南吉児童文学賞）詩集『貝がらをひろった』他。東京都杉並区在住。

表記について　＊この詩集は、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、常用漢字表にある漢字は新字体にしました。送り仮名・音訓は原作のままです。
＊振りがなは原文にあるもののほか、編者の判断で小学中級でも読めるようにつけました。

美しい日本の詩歌 ⑩
啄木・中也・道造詞華集　夢（ゆめ）
一九九六年一月二十日　初版第一刷発行
一九九六年五月十五日　第二刷発行
著者　石川啄木・中原中也・立原道造
画家　的場遊子
責任編集　北川幸比古
発行所　株式会社岩崎書店
東京都文京区水道一ノ九ノ二〒112
電話　〇三－三八一二－九一三一（営業）
〇三－三八一三－五五二六（編集）
振替　〇〇一七〇－五－九六八二二
発行者　岩崎弘明
印刷　株式会社金羊社
製本　株式会社若林製本工場
●乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

© Y. Matoba, S. Kitagawa,
by IWASAKI SHOTEN
Printed in Japan ISBN 4-265-04050-0
違法コピーは禁止されています。

啄木・中也・道造 詞華集 夢（ゆめ）



もくじ

石川啄木集

詩（「呼子と口笛」ほかより）

飛行機 8
口笛 9
路傍の草花に 10
拳 12
はてしなき議論の後 14
火星の芝居 16
我を愛する歌 20
東海の小島の磯の白砂に 20
頬につたうなみだのごわず 20
砂山の砂に腹這い 20
いのちなき砂のかなしさよ 21
大という字を百あまり砂に書き 21
燈影なき室に我あり 21
たわむれに母を背負いて 21
こころよく我にはたらく仕事あれ 21
浅草の夜のにぎわいに 22
何處やらに沢山の人があらそいて 22
鏡屋の前に来て 22
腕組みて 22
それもよしこれもよしとてある人の 22
ダイナモの 23
こころよき疲れなるかな 23
はたらけど 23
友がみなわれよりえらく見ゆる日よ 23
男とうまれ男と交り 23
わが抱く思想はすべて 24

散文詩

短歌（「一握の砂」より）

煙 24
己が名をほのかに呼びて 24

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

師も友も知らで責めにき　24
教室の窓より遁げて　24
不来方のお城の草に寝ころびて　25
盛岡の中学校の　25
先んじて恋のあまさと　25
そのむかし秀才の名の高かりし　25
わが妻のむかしの願い　25
ふるさとの訛なつかし　26
その昔　26
かにかくに渋民村は恋しかり　26
石をもて追わるごとく　26
やわらかに柳青める　26
小学の首席を我と争いし　27
意地悪の大工の子ともかなしかり　27
汽車の窓　27
ふるさとに入りて先ず心傷むかな　27
そのかみの神童の名の　27
ふるさとの山にむかいて　28

秋風のこころよさに　28

人ひとり得るに過きざることをもて　28

忘れがたき人人　28

わがあとを追い来て　28
船に酔いてやさしくなれる　29
函館の青柳町こそかなしけれ　29
しんとして幅広き街の　29
かなしきは小樽の町よ　29
汝が痩せしからだはすべて　29
平手もて　30
權太に入りて　30
共同の薬屋ひらき　30
うす紅く雪に流れて　30
空知川雪に埋もれて　30
寂寞を敵とし友とし　31
遠くより　31
さいはての駅に下り立ち　31
しらしらと氷かがやき　31

吸うごとに　31
馬鈴薯の花咲く頃と　32
君に似し姿を街に見る時の　32
かの声を最一度聴かば　32
しみじみと　32
死ぬまでに一度会わむと　32
時として　33

手套を脱ぐ時　33

手套を脱ぐ手ふと休む　33
春の雪　33
よごれたる煉瓦の壁に　33
人気なき夜の事務室に　34
ゆえもなく海がみたくて　34
赤紙の表紙手擦れし　34
水のごと　34
気弱なる斥候のごとく　34
若しあらば　35
晴れし日の公園に来て　35
公園の隅のベンチに　35
夜おそく　35
二三こえ　35
真白なる大根の根の肥ゆる頃　36
おそ秋の空気を　36
呼吸すれば、　36
途中にてふと気が変わり、　36
遊びに出て子供かえらず、　37
本を買いたし、本を買いたしと、　37
二晩おきに　37
新しき明日の来るを信ずという　37
考えれば、　37
今日ひょいと山が恋しくて　38
何となく、今年は　38
人がみな　38
いつまでか　38
何となく、明日は　38
家にかえる時間となるを、　39
目さまして直ぐの心よ！　39

（悲しき玩具」より）

中原中也集

詩

（明治43年10月「創作」）

自分よりも年若き人に　39
珍しく、今日は、　39
あやまちて茶碗をこわし、　39
古新聞！　40
「石川はふびんな奴だ。」　40
何となく自分をえらい人のように　40
軍人になると言い出して、　40
うっとりとなりて、　40
「労働者」「革命」などという言葉を　41
かなしきはわが父！　41
ひる寝せし児の枕辺に　41
クリストを人なりといえば、　41
庭のそとを白き犬ゆけり。　41
何となく顔がさもしき　42
つね日頃好みて言いし　42
今思えばげに彼もまた　42
秋の風我等明治の青年の　42
時代閉塞の現状を奈何にせむ　42
地図の上朝鮮国にくろぐろと　42
明治四十三年の秋のわが心　42

（山羊の歌より）

サーカス　44
帰郷　46
夏の日の歌　48
汚れちまった悲しみに……　50
頑是ない歌　52
北の海　55
月夜の浜辺　56
除夜の鐘　58

（「在りし日の歌」より）

童話

正午 60
家族 62
夜汽車の食堂 64

立原道造集

詩

（「さふらん」より）
ガラス窓の向こうで 68
忘れていた 68
田園詩 69
僕は 69
はじめてのものに 70
のちのおもいに 72
眠りの誘い 74
夢みたものは…… 76
ゆうすげびと 78
村ぐらし 80
村はずれの歌 84
夜に就て 85
（「萱草に寄す」より）
（「暁と夕の詩」より）
（「優しき歌」より）
（「風に寄せて」ほかより）

物語

装画 的場遊子
略年譜 北川幸比古 95
解説 北川幸比古
美しい日本の詩歌 刊行の言葉 100

石川啄木集

飛行機

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高くとべるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたったふたりの家にいて、
ひとりせっせとリイダアの独学をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高くとべるを。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

口笛

少年の口笛の気がるさよ、
なつかしさよ。
青塗の自動車の走せ過ぎたあとの、
石油のにおいに噎せて、
とある町角に面を背けた時、
私を振回って行った
金ボタンの外套の
少年の口笛の気がるさよ、
なつかしさよ。

路傍の草花に

何という名か知らないが、
細い茎に粟粒のような花をもった
黄色い草花よ、
路傍の草花よ。
――何だか見覚えがある。

銀のような秋風が吹いて、
黄色な花が散っている。

ああ、そうだっけ。――
中学校の片隅の

あの黒壁の図書倉の蔭に隠れて、
憎まれ者の私が、
濡らした頬もぬぐわずに
じっと見たのもお前だったが――

長い〳〵前のことだ。
あの眇目の意地悪は、
破れ靴を穿いた級長は、
しょっちゅう眼鏡を懸けたり脱したりし乍ら、
よく私と喧嘩した蒼白い英語教師は、
今はみな何うなっているやら。
銀のような秋風が吹いて、
粟粒のような黄いろい花が
ほろ〳〵と散っている。

拳

おのれより富める友に慰れまれて、
或いはおのれより強い友に嘲られて
くわっと怒って拳を振り上げた時、
怒らない心が、
罪人のようにおとなしく、
その怒った心の片隅に
目をパチくりして蹲っているのを見附けた——
たよりなさ。

あゝ、そのたよりなさ。

やり場にこまる拳をもて、
お前は、
だれを打つか。
友をか、おのれをか、
それとも又罪(またつみ)のない傍(かたわ)らの柱をか。

はてしなき議論の後

われらの且つ読み、且つ議論を闘わすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前の露西亜の青年に劣らず。
われらは何を為すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
"V NAROD!"と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、
また、民衆の求むるものの何なるかを知る、
しかして、我等の何を為すべきかを知る。
実に五十年前の露西亜の青年よりも多く知れり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com